夏と家庭

永代美知代

夏、夏、この言葉、この文字を見聞きしたゞけでも私はあつくるしい。私は夏が大嫌ひです。

一つには體の弱い加減もありませう、いやに手足がかつたるくつて、縱のものを横にもしたくないと云つたところで、子供があつたりしては、それエプロンだそれ浴衣だと、たえず洗濯物に追はれ勝ちで、さうさう人手ばかり待つてもゐられず、ゆつくりなまけてゐる餘裕もありません、其上に八百屋、肴屋とお總菜物をめつけ歩くそのせいで、皮膚までが眞黑に日燒けして、いやが上にも醜くなるんだもの、蚤はゐる、おまけに折角お行水でも使つて、のんびり夕涼みでもしようとすれば、ブーンと小うるさい蚊のうなりが耳元を襲つて來る。

全く夏といふものが大嫌ひになる譯だと思ひます。

然ればと云つて、

人間此世に生きて居る以上

春夏秋冬、夏だと云つて一年一度さける譯には行きません、いやでも應でも暑い、ものうい、夏を迎へねばならぬ。

私は引越す度毎、第一に蚊の居ない場所をとねらつて貸家を探します。併し夏中一疋も蚊のゐない土地柄といつては、先づ〳〵廣い東京にもありますまい。銀座、日本橋、あの邊の商家では、一年中一晩か二晩位

しか、蚊帳をつらないとか、そんな話も、聞きましたですけれども生活萬端の關係から、一生そこいらに住ひさうもありません。

海に山に、暑い東京の夏をさけ度いとおもふ事もありました。夫妻に子供たゞ一人の氣安い私達は、家族相携へて輕井澤にも行きました。歌枕寢覺めの床をたづねて、八月の眞夏を、木曾の山路に鶯聞きながらわらびをつんだこともありました。或は山の湯に、或は海岸に隨分避暑もして歩きましたけれども、要するに夏は何處でもあつくるしい、蚤もゐます、蚊もゐます。

なまじつか、あついのに汽車に乘つたり船に乘つたり、でたく動き廻つて、旅宿の二階に窮窟なおもひをしやうより、いつそのつと自分の家に落著いて、誰に氣兼ねもなく呑氣に暮した方がどんなに可いか知れません、つまり呑氣なのが一番の避暑法かと思はれる。

（志賀重昂氏令孫のニコニコ）

と云つて私は何ものらりくらりなまけねるのを呑氣だとも思はない、暑い〳〵を口癖に、

終日何もしないで枕と團扇

にばかり親しんで、ねたとてろで、やつぱり涼しくない。けつく仕事がなければないだけに、暑い事ばかり考へて凌ぎ難いものである。

それよりは洗濯もする、しなければならぬ家の用事を何から何までテキパキと片づけてしたい時には晝寢もするし、裁縫もする、そして夕方早く行水でも使つて、糊の香新らしい浴衣にさつぱりと著かへ、愛兒の手をひいて一廻り其處いらの夜涼

を廻つて來る。序に明日のぬか味噌の材料も買はうし子供のために、松蟲鈴蟲ちんちろりんといつたものを求めるのもおもしろい。

そして若し出來たなら――私がたえず理想としてゐる夏の家庭としての、註文と云ふのを云はうなら、先づ第一に家中の障子をてまかい金網にはりかへてしまひます、と云ふのは、うるさい蚊だのうんかだの、翅蟲をふせぐためなので、晝間の間は風通しの具合で別によし障子を用意して置くのも可いでせう。

そして家のぐるりへてんもりと樹木を植ゑます。これは日光をふせぐためで、茶の間の軒近く夕顔を、書齋の窓には藤か葡萄か、臺所から裏の垣根に添うて一面、いんげんだの藤豆だの、さうしたつるものを植ゑて置けば、白いの紅いのとりぐの花が咲いて、朝夕の水仕業にも自らのおもむきを添へやうといふ、殊には突然の來客に、もぎたての生瓜を刻み、いんげんの精進揚げなど、却々に調法なものですよ。

葡萄、梨、水蜜桃、すも、

何に限らず夏の果物をつくり庭に植つて、而も豐富にグミ、ブラックベリーと云つた風のものまで、子供のために、ちやんとあるやうに出來てゐたなら、まあどんなに幸福で、たのしいでせう。

冷藏庫、ビールや果物、其他魚肉をしまつて置く冷藏庫も欲しくないではありません、けれどもそれは井戸若しくは氷でも用がたります、强てなくてならぬ、欲しくてしかたがないと云ふでもありません、併しその代り、私は是非一つだけ電話を欲しいと思ひます。

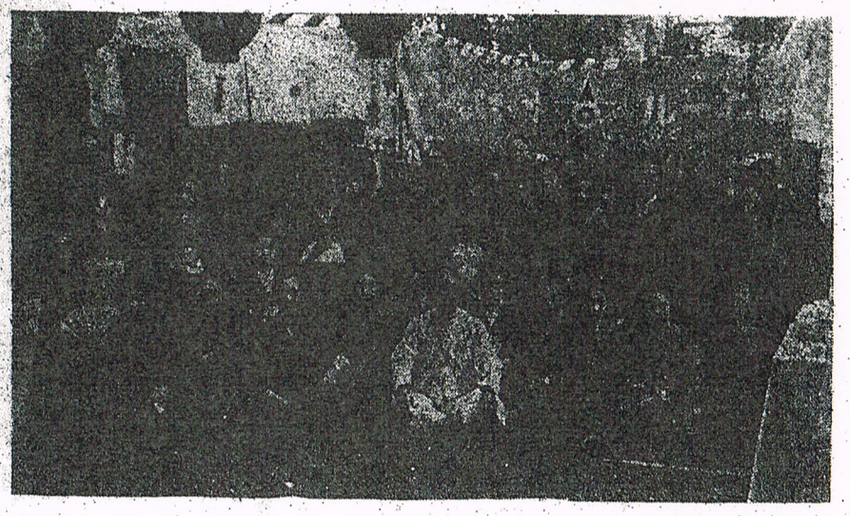
肉だの魚だの、不意のお客でもない限り、大抵は御用きゝに命じて持たせるとか、日蔭を待つて買ひに出るとか暑い日盛りにわざ〳〵出歩く必要はありませんけれど、急に或人との用談など、電話があれば、一寸とモシ〳〵、チリン〳〵ですませる事も、わざ〳〵著物を著かへて、汗を流して出掛けねばなりません、そして大汗になつてまで訪ねて行つて、先樣で喜ばれゝばまだしもですけれど、大抵眞夏眞晝の來客はあつくるしく、私にしたところでさして感心致しません。

此意味から云つても、

私は是非電話が欲しい。

かと云つて今の日本の中の中、中の下と云つた階級の、普通商賣も何もしてゐない家庭で、自宅に電話を引かうと云ふのは、蓋し出來ない相談かも知れません。

何しろ電話一つ引くには何百圓とまとまつた金を持たなければ駄目なのですもの、私は第一にその制度を破つて、つひ五圓か十圓位のお金で以て、家なみに電話をしく樣にしたらどんなに好都合で、みんながハッピーだらうと思ひます。



（築地光琳の開業五周年記念園遊會）

金持ちのやうな自動車もいりません、別莊もいりません、私はあまりに日近くない、こんもりとした、木立を持つた一寸とした一軒の家に住つて、あつい日盛りに出歩かないでも用事の足りるやう、モシ〳〵、チリンチリンの電話が一つありさへすれば、おゝどんなに涼しい、呑氣な夏が過ごせるでせう！

とは云へこれも皆なお金がなくては出來ない相談で、電話はやはり何百圓かの金を要します。何れは實現され得ない空想なのですけれど、それでも、暑い暑いと云つてゐる代りに、こんな事を晝寢の夢にしてゐたら、その間だけでも涼しいのねえ。